

Title	Arthur J. Penty: Post-industrialism.
Sub Title	
Author	加田, 哲二
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1923
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.17, No.2 (1923. 2) ,p.305(147)- 307(149)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19230201-0147

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「論集」第四卷所收の土地問題に關する論文、及び土地改良に關する論文の説明する所は、MIIIが、其執筆當時に於ける各政黨所屬の多數人士と同様に、現在の土地制度の側に於ける勢力の強さを輕視したと云ふことである。而して同様の言は、移して以て Sir Henry Maine の「村落共同團體」(The Village Communities)の批評に於ける或語句にも適用することが出来る。Maine の著書は、非常な興味と歎賞とのため特殊の注意を受けるに足るものであつて、夫れは、MIII自身よりも遙かに保守的傾向と深き關係のある場合である。MIIIが天才と博學との著書を祕かに求めて居たと云ふことが説明する所の興味であり、又歎賞である。

Bishop George Berkeley の著書に關する論文は、心理學的批判の斷片として、頗る眞正價値ある以外に、又 MIII の見解に大いに反對せる

新刊紹介

Arthur J. Penty: Post-Industrialism.

pp. 154. Price. 6/- George Allen & Unwin, Ltd.

産業革命以來の社會は機械の社會であり、物質の社會である。すべての社會現象は機械的生産力によつて制約せらるゝに至つたのである。營利をその本則とする近世經濟組織中に生存し、一度經濟學祖アダム・スミスによつて分勞の利益を教へられた經濟學者は、機械と分勞との世界を讚美する。そは能率の社會であり、數量的社會である。生産費の低廉と産出財貨の數量的増加、さうしてこれに伴ふ自由競争とは、過去並びに現在における幾多の經濟學者の黄金世界である。

この自由競争を基礎とする社會、生産費の低廉と財貨の數量的増加を目的とする、換言すれば貨幣價值増殖を目的とする生産に對して、倫理と藝術の立場から批判、攻撃した人士は少なしとしない。英國のヴィクトリア時代は英國の「社

宗教的見解と深き關係のある天才に示した同情を以て目立つて居る。

「論集」第四卷は、其他有益なる論文以外に、George Grote の「アリストートル論」の批評を載せて居るが、評者 MIII に對しては多數の人が斯る主題に對する批評として傾聴せらる可き最高の要求あることを否定しないであらうし、又多數の人は、彼のために論理學の創設者の最も著名なる後繼者の間に Sir Francis Bacon の並んで一の地位を指定するであらう。(Essays in Political Economy, 1888, pp. 54-59.)

會的進歩の最高潮に達した時とせられてゐる。この時代にあつて哲人トマス・カアライルはその倫理的見地からマンチェスター學派の自由主義とその實際を攻撃した。カアライルにおいて、その優秀なる師を見出したジョン・ラスキンは倫理と藝術の立場から中世紀的精神の復活を主張した。ジョン・ラスキンが藝術批評家から社會批評家となつたのに對して、身自ら藝術家であつたウヰリアム・モリスは、その藝術の立場から現代の物質文明の野卑を攻撃して、共產主義の陣營に走つた。彼等の立場は、他の社會主義者が社會問題の起因を胃の腑の問題と解するのに對して、それを倫理の問題であり、藝術の關するところであるとした。彼等の主張は共鳴を得ることが比較的少なかつた。藝術的運動である Art and Craftsmovement (モリスはこの運動に參加す)は工藝において中世紀的傳統を復活せしめんとした運動であつた。さうしてこの運動の失敗と共に起つたギルド思想(千九百六年)は正にラスキン、モリスの傳統を受けたものである。

然るにギルド社會主義運動が漸く労働者階級
 の間に勢力を得るや、その主要なるナショナル・
 ギルド同盟の一派(ユールの一派)は益々ギルド
 運動本來の中世紀的精神と離れ來つて、集産主
 義との妥協に生さんとする。この時に當りて、
 ラスキン、モリスの思想的傳統を最も有力に把
 握して行かふとする者は、吾人がこゝに紹介せ
 んとするアーサー・ペンテイ、その人である。ペ
 ンテイの新著 Post-Industrialism は、彼がラスキ
 ン、モリスの傳統に忠なることを示してゐる有
 力な證左である。ペンテイは先づ現代の社會問
 題の根底が機械の亂用にあることを指摘し、如
 何なる所有權形態の變更も、機械の亂用をその
 まゝにするときは、社會問題解決の期あらざる
 ことを警告する。(第一章)この點に就ては既に
 ラスキン、モリスの有力に主張したところであ
 る。然るに多くの經濟學者社會主義者は、生産額
 の激増なる一事に幻惑して、機械化現象の人生
 に對して如何に悲惨なるかを悟ることが出來な
 かつたのである。アーサー・ペンテイの議論は、

ける供給過剰は彼等を苦汗制度と經濟的不安
 などに導くからである。(五八—五九頁)「文
 明を保存せしめるならば、ある程度までの
 専門化を吾々は持たなければならぬ。然
 しながら、人間がもし、道德的に、智識的に、ま
 た精神的に墮落しないことを欲するならば、
 ある點において制限を設けなければならぬ
 い。(六二頁)何となれば、「すべての創造的
 の仕事は窮極において個人的であることは眞
 實だ」からである。(六五頁)

「こゝに困難なことは、現時の普通の人々は、
 宗教と藝術とから離れてゐるので、たと數量
 上のことのみしか考へられないことである。
 彼に對して進歩の觀念は一の數量的觀念であ
 る。故に彼は數量的標準の放棄を意味するす
 べての思想を排するのである。(七五頁)

以上引用するところは、本書前半の部分であ
 つて、その後半は如何にこの數量的社會を救ふ
 べきかに關するものである。彼はこの部分にお
 いてギルド組織やデモクラシー、中世紀への復

この點を基礎として出發する。今原著よりの僅
 少なる引用によつて、著者の大體の考察を知る
 に満足しなければならぬ。

「機械は模倣的である。それは如何なる意義にお
 いても、創造的ではない。機械は模倣をする、
 然もそれは一定物だけしか模倣し得ない。何時
 もあるものは省略せられるのである。機械に
 よつて再生産し得ないある品質がある。その
 品質は氣分である。機械の産物には氣分が出
 ない。(四二頁)

「藝術は精神的目的に役立つ。機械と商業主義
 とは物質的目的に役立つ。…審美的並びに
 機械的標準は詩と論理のそれの如く異なる。」
 (四三—四四頁)

「労働の細分とその近時における科學的管理
 法への進化は産業文明の呪である。何となれ
 ば、それは人間を自働機械の水準に下し、人を
 して單なる人間の斷片ならしめ、さうしてそ
 の精神的、道德的、肉體的生活を障害し、彼
 等の人格を分離せしめ、さうして、市場にお

歸の意義を述べてゐる。けれども吾々の興味を
 感ずる點は、この後半における建設的部分でな
 くして、前半の批評的部分である。吾々經濟學
 徒は既に久しきに涉つて、經濟學内に彌漫する
 物質主義に禍されて來た。經濟學徒は數量以外
 に何等かが存在することを知らなければならぬ
 い。嘗てフリエによつて主張せられた愉快なる
 労働の議論は、久しく空想の名の下に棄せられ
 て來た。ラスキン、モリスの労働論も多くの經
 濟學者の顧みるところとならなかつた。吾々は
 現在の經濟學徒が再び労働の新解釋へ歸るべき
 ときは來たと思ふ。私がペンテイの書を紹介す
 る所以はこゝにある。嘗てクロポトキンは社會
 問題に就いて、青年に訴ふべくその An Appeal
 to the Young を書いた。私はその意味において
 ペンテイの著書を青年學徒(年齢に就いて云ふ
 のではない)に紹介したいと思ふ。

(加田哲二)